

2 1 世紀の日本のかたち（2）

--- 生存の理法と地球居住の中で ---



戸沼 幸市

（財団法人日本開発構想研究所 理事長）

1. ヒマヤラトレッキング

3年ほど前の秋、ヒマラヤの麓をトレッキングする機会に恵まれました。海拔1,280mのカトマンズから小型機でトレッキングのベースキャンプ・ジョンソンまで、そこからはダウラギル(8,167m)と氷河を目前にする3,000mほどの台地にあるナウリコットの小屋まで馬に乗りながら、晴れ渡ったヒマラヤの山々の眺めを満喫しました。

世界の屋根、万年の氷雪におおわれたエベレスト、マナスルなどの連なりはまことに壮観なものです。ヤクの棲息しうる高度限界は4,000m付近にあるらしく、ヒマラヤでは私自身この付近にヤクの黒点を認めることができました。4,000mを超えると酸素が希薄となり、もはや人間は定住はできない「非可住地」ということになります。

ところが近年、ヒマラヤに異変が起つております。地球温暖化の影響で氷河が溶け出し、周辺に大きな異変を起こしながら、ガンジス川に流れ込み、大洪水を引き起こして居住地と農作地帯に大きな打撃を与えております。

古来、非可住地は聖地でありました。

2. 地球温暖化

太陽の惑星、大気に包まれ、海と陸からな

る人類生存の原面である地球に、今大きな変化、地球温暖化が生じ、これによりこれまでの人間居住の在り方に直接打撃を与える事態が起きております。

近代の機械文明、化石燃料の爆発的利用によって、地球の温度が上昇し、これが原因で北極、南極の莫大な氷が溶け、海水の膨張と合わせて海水面が上昇していることが信頼性のあるデータをもって報告されています。

近・現代にできたほとんどの都市は海岸につくられており、もし海面が数メートル上昇するならば、人間が密住するこれら地域の見直しをせざるを得ないこととなります。

人間は地球上で、人体に見合った環境に生存領域を選択し、そこを可住地として家、村、都市を築いてきましたが、その地域の生態系に見合った生き方、生活のかたちを維持していた時代から、近代・産業革命以後手に入れた巨大なエネルギーによって、地球に大規模開発をほどこし、交通を発達させて巨大都市を發明してきました。この間、地球人口は爆発的に増加をつづけてきました。ここで人類は「生存の理法」を越えて大きな問題を抱えてしまったともいえましょう。

3. 地球の非可住地の大切さ

青い天体たる地球は7割の海洋を残し、3割の陸地のうちの一定地域を可住地とし、他を非可住地として温存してきましたが、ここに来て、地球の生存環境として重要な非可住地に手を突っ込んでしまったといえます。

非可住地①極地（南極、北極）②極的気候の高地（ヒマラヤ山脈など）③乾燥砂漠地帯（北アフリカ、西南アフリカ、西アジア、オーストラリアなど）④熱帯雨林（アマゾンなど）は可住地のバックアップエリアです。

まず、人体を焼き尽すほどの高温のもとで、多少の雨量もただちに蒸発させてしまう砂漠の非可住地、乾燥地帯の地下深くから人間は大量の化石燃料を取り出し、地表へのCO₂の大量排出の直接の原因をつくり出してしまいました。また、極地環境や砂漠と対称的に十分な水と適温をもった生物環境であるために、動植物や細菌の繁殖が人間を追い出してしまう地帯として温存してきたアマゾンなどの非可住地域に人の手が入りました。近年、このアマゾンでは年間、東京都の面積の6倍の緑地を消失させているということです。ここは地球の一大酸素供給地です。砂漠と熱帯雨林への大規模な介入とあいまって、地球の可住地は拡大、膨張し、端的にはCO₂の排出による地球の温暖化は南極、北極、ヒマラヤなどの莫大な氷を溶かしています。

地球の7割を占める海の変動が因果的に陸地の人間を含む生命環境を脅かすほどの影響を及ぼしていることが科学的に証明され始めています。

4. 生存の理法を越えた人間の振舞い

地球における生命環境、人間の生存と生活環境が19・20世紀に持ち込んできた機械文

明によって大きな危機に立たされている事態といえます。

20世紀は機械戦争の世紀でもありました。近代国家という枠組みをもって人間が人間を大量に殺戮するという事態そのものは「生存の理法」を越えるものですが、戦争による諸種の爆発は、少なからず地球温暖化の原因になっているはずで、21世紀、地球上において国単位で戦争などしている場合ではないと思うのです。

地球温暖化問題は、小さな一個人の手におえる問題ではありません。日常生活において省エネルギー、省資源型のライフスタイル、地域の小さな生態圏でのつつましいゆっくりとした生活スタイルなど、生活を見直すことも大切なことに違いありませんが、少なからず国家と国家間の問題です。

5. 南極に国連本部を 海を国連領域に

国家という枠組みが地球における人間居住の仕切り、枠組みとして大きな存在である以上、これは地球における人間居住を律することに力を発揮すべき時です。と同時に国家の連合体としての国連の役割は、ますます大きくなっていくに違いありません。

その際、地球居住を非可住地から検討することが重要です。併せて国家の枠からはずれた非国家領域、海と南極はこれからの地球居住に大きな意味を持つことになりましょう。これからの地球居住の在り方を想定する際、海を国連領域に、国連本部を南極にという発想があってもよいのではないかと思います。

6. 21世紀の日本のかたち

21世紀、日本は合計特殊出生率が2.0を切り、少子高齢化のプロファイルをもって本格的な人口減少社会に入りました。予測では

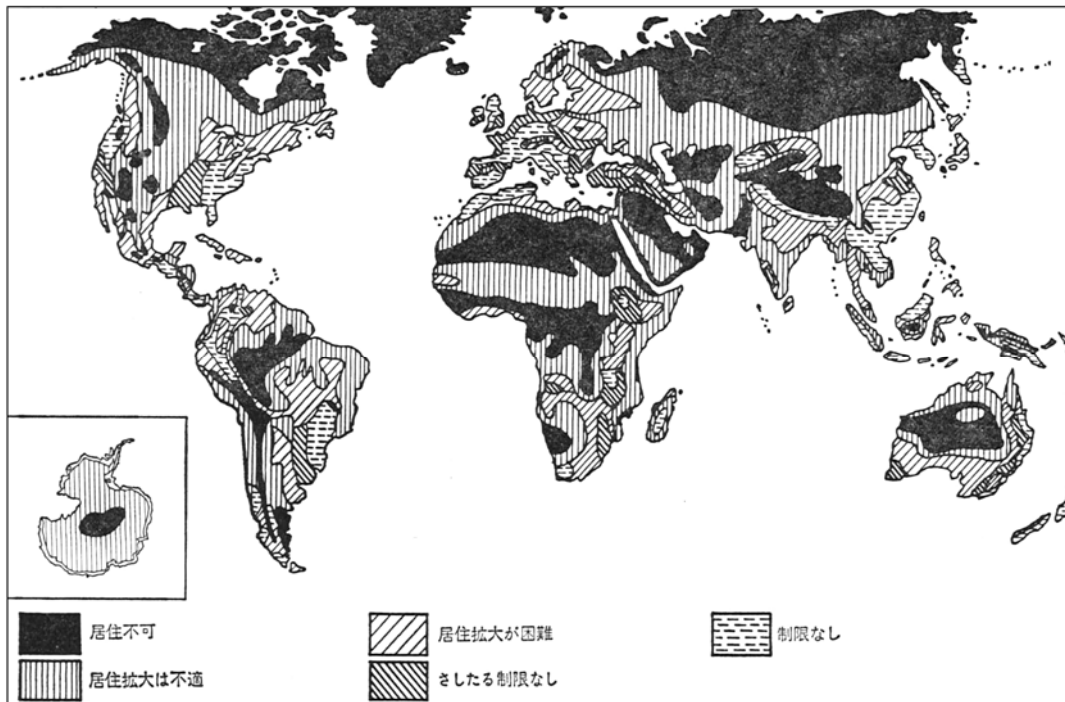
2050年に1億人を割って、2100年には江戸時代の人口に近く5,000万人を下まわるとのことです。この人口減少は、地球温暖化に深く係わっているという見方もできましょう。端的には1人当たりのエネルギー消費量が劇的に減少することになるからです。そもそも地球温暖化によって女性ホルモンに変化が生じ、これが出生率の低下に直接つながっているという説もあります。私自身は日本列島における大量の人と機械、マンーマシンの混み合いが限度に達して、人間の側が自ら人口調節をしているとも考えています。動物が個体の増加によって混み合ってくると、自動的に個体が減るといった生存の理法が働いている図が重なります。ヨーロッパ先進諸国においてもこれと同様の現象が起きています。人類の「生存の理法」とは、ホモサピエンス

としての人間種にも内包されているのかもしれない。

海に囲まれた4,000の島からなる38万平方キロの日本列島は、地球的に言えば丸ごと水と緑に恵まれた可住地といえます。19・20世紀、日本人はここに存分にあるいは過剰に機械文明を発展させてきました。この事態をどのように評価するかは、人口減少社会から見て21世紀の日本のかたちを考える上での基本命題です。

今年、日本は地球温暖化を、根本的には地球居住をテーマに洞爺湖サミットを主催することになっています。ここでの議論はとりもなおさず、主催国として地球居住の中の「日本のかたち」が示されることになり、これを見守りたいと思います。

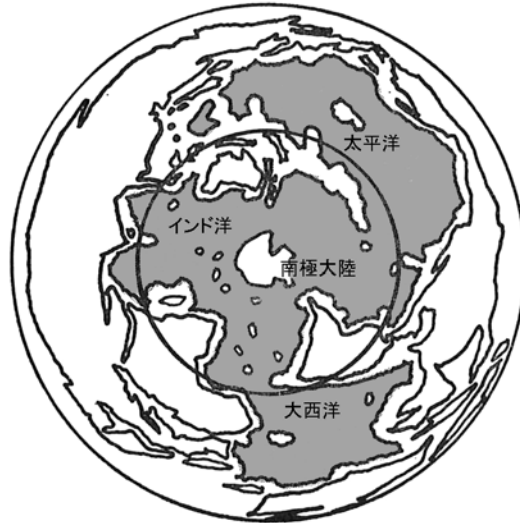
地球の可住地・非可住地



(C.A.Doxiadis : Ecumenopolis より作成)

出典:「人口尺度論—居住環境の人間尺度」戸沼幸市(昭和55年12月)

国連領図案—南極に国連本部を、海を国連領に



(早大 21 世紀の日本グループ)
出典:「人口尺度論—居住環境の人間尺度」戸沼幸市 (昭和 55 年 12 月)